

個に応じた教育、個に応じた支援

県教育庁教育次長

村 木 智 幸



もう四十年近く前になるが、大学の専門課程に進む際、心理学と迷ったあげく社会学専修課程を選んだ。興味もあるにはあったが、研究室に当時の若手オピニオンリーダーのような人もいて、憧憬のような気持ちも影響して、というところと思っている。その専修課程で最も印象に残っているのが、「集団」をテーマにしたゼミでの議論で、「包摂と排斥」といった言葉を今でも覚えている。他者に同質化を求めるのが「包摂」、他者を異質化して境界に追いやるのが「排斥」。いずれも、本来、単に個人の集まりに過ぎない集団が、集団そのものの価値を高めるために、無意識的に行われる作用だ。精一杯思い出している程度だが、教育の仕事させていた、大きくようになって、いじめ、不登校、インクルーシブ、等々の課題に接する中で、学生時代の議論をふと、懐かしく思い出す。

先日、某公共放送で不登校をテーマにした番組を見た。その中で、不登校の子どもの心理として、学校に行くことによって、同年齢

の子どもたちの集団の中で自分が見られる、評価されるといったことへの心理的抵抗感のようなものを取り上げられていた。先ほどの集団の包摂と排斥といったことを敏感に感じてしまっているのかも知れないと、そのシーンを見て感じた。だから、その子どもは、学校へ行くのは難しく、問題を抱える様々な年齢の人たちが集まる場へは入っていきけるのだと。そういった場に集まる人たちは、もともと年齢だけでなく、これまでの経緯も含め様々であり異質性が高いために、その場で作られる集団から自分が同質化を求められたいと感じなくて済む、ということかな、と思った。

もちろん教育の大切な役割として、子どもたちに社会性を身に付けさせるといったことがあるわけだが、その道筋として画一的に進めるのが適当でない場合もある。最近よく聞く「個に応じた教育、個に応じた支援」という言葉がある。この言葉を大事にしていきたいと思っている。